



「狸台林道」を視る

——そこに自然は甦ったか——

一、はじめに

問題のはじまり

「狸台林道」問題が本道の自然保護運動に登場したのは、八年前の一九七三年のことである。「大雪縦貫自動車道計画」をめぐる論議が最終段階にさしかかっていたこの年の八月、「旭川大雪の自然を守る会」のメンバーは、大雪山国立公園周辺の道路について自然破壊の実態調査を続けていた。同年八月十七日、国道二七三号線大雪大橋付近を調査中、対岸にかなりの規模にわたる筋状の森林伐採跡地と、ブルトージャーによる開削場面を目撃する。同年九月八日、ニセイチャロマップ林道、ポンケチャロマップ林道調査時に、ペンケチャロマップ林道工事を目撃。十月十八日、北海道開発局大雪ダム計画書より、狸台地区(俗称)に一連の林道計画があることを確認。直ちに

旭川営林局、旭川開発建設部と計画内容、自然保護上の問題をめぐって「交渉」を開始。

翌七四年、同地区の林道計画が、自然保護、水源涵養保安林としての機能、国立公園特別地域としての性格などの上で重大な問題であるとして国会で問題となる。同年八月、旭川大雪の自然を守る会による自主調査により、「狸台林道」(Ⅱ)開削に伴う自然破壊の惨状たる実態が明らかになる。同月下旬、北海道開発局、旭川営林局、全林野旭川地本、旭川大雪の自然を守る会の四者による合同視察。同年九月道議会で論議、保安林指定解除をめぐる「違法行為」が問題となる。同年十月、環境庁現地視察。

その後、自然保護上、地形・地質の性格上の問題が明らかとなり、未着工の「狸台林道」(Ⅲ)、「ペンケチャロマップ林道」(Ⅰ)延長の両者は計画中止となり、特に後者は

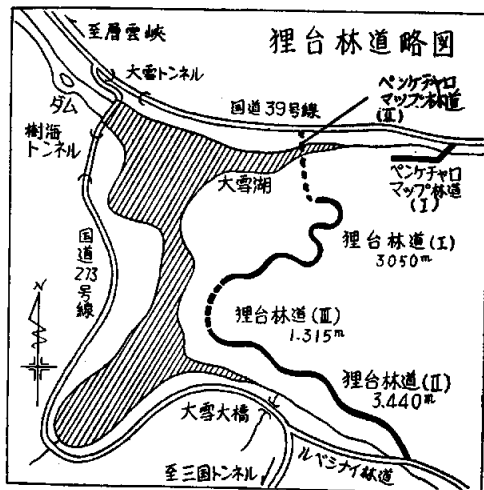
五〇〇m工事着工段階で中止、廃道となる。代替計画として、既設の「狸台林道」(Ⅰ)と国道三九号を橋で結ぶ「ペンケチャロマップ林道」(Ⅱ)案がもち上がった。

ところが、七五年秋の豪雨で橋の建設予定地付近で大規模な崩落が発生、計画の再検討を余儀なくされた。その後、同計画は実施されないまま大雪ダムの水没補償の一部として、開発局と営林局の間で「金銭補償」のかたちで処理されたと聞く。

二、ニセイチャロマップ林道を視る

林道を視る

あれから七年、表大雪の林道はどう変わったか。毎年、視察、調査、見学などのかたちで注意がはらわれてきた。昨年、九月七日、一行十一名は三台の車に分乗し、朝八時旭川を発ち視察に向う。十時十五分



大函よりニセイチャロマップ川に沿い同名の林道(総延長一五・八九km)に入る。前約一〇kmほどは、比較的古い林道で、河畔に沿った平坦な地形を利用してはいる。風倒被害の大きかったと思われる両岸の急傾斜地にも、カンパ類、針葉樹の若い樹が多く、更新もようやく順調になってきているようだ。十五号台風から二十数年を経て、ようやく大雪の山ふところに自然の回復力が逞しく働いている。

ポンケチャロマップ林道との分岐点を過ぎるあたりから景観が荒んできた。林地はかなり荒廃し、現在なお風倒が生じているように思われる。土場跡とみなされる地面

の整地も悪く、車の走行もだんだん困難になってくる。七三年調査時、開削が終ったばかりだった地点を見る。尾根筋のひとつを切り開いて造られた林道の北側斜面は、ヤナギ類の枝で一〇m程度の階段状の土止めを施して、牧草が植えられている。下の方はヤナギ類、カンバ類がスポット状に広がりつつあるが、三角形の斜面の上方ではほとんど見られない。小規模な土砂の崩落が生じている。開削七年後の現在、自然植生の確実な回復をこの地点に認めることは困難であった。同地点で車を降り、さらに上流に向う。林道というよりは作業道に近

い。奥地での伐採が行われているせいであろう。流木がかなり目だつようになる。粘板岩の地層の中に円礫の礫層を見る。手で触ると簡単に崩れてきた。かなり風化が進みもろくなっているようだ。武利岳(一、八七六m)の北尾根が正面に迫る。国立公園の境界が近いことを知る。倒木更新以外の自然更新がほとんど不可能とされる高地で、なお伐採が進行している。複雑な気持で時計を見る。

車をポンケチャロマップ林道(総延長七・四km)に向ける。同林道分岐点より約一km南に進んだ地点で東斜面に崩落跡を見る。崩落場所に注意すると礫層がある。古い川の跡である。牧草を吹きつけているが

定着した様子はない。おそらく降雨、融雪の多いときには今後も崩落がつづき、自然植生の定着までには予測困難なほどの長い時間を必要とするだろう。この路線が林業施業上、必要不可欠なものだったとしても地形、地質上の綿密な検討、工法上の慎重な工夫がなされなければならなかったのではないかと思われる。屏風岳(一、七九二m)を右手後方に観る。森林限界から上はもう紅葉が始まっていた。

三、自然の廃墟 ポンケチャロマップ林道

正午すぎ、国道三九号線に出る。並行して流れるポンケチャロマップ川に沿い、同林道の入口に直行。この川は「大雪原生林」を通過し、「大雪湖」にそそぐ石狩川の一支流で、同名林道(Ⅰ)(約〇・五km)はこの川の対岸を走っている。大雪ダム建設にともなう旧林道の水没補償林道(狸台地区)のひとつとして、七三―七四年に工事着工。自然保護上多くの問題があるとしてその後、中止、廃道となった道路である。林道入口の橋から見下すと清流が美しい。ところが一〇〇mと進まないうちに、かかえることのできないほどの巨礫がゴロゴロ転がっている。廃道後の崩落の姿である。開削時にできた急峻な斜面はいたるところ

で崩壊し、路面は崩落した粘板岩の巨礫や土砂で、元の形をとどめないばかりになっている。後でふれる「狸台林道」(Ⅱ)と比較して、巨礫の崩落の多いのに驚く。わずか〇・五kmの工事でこの姿であり、仮りに延長されていたら、その破壊の程度は大変なものになり、維持、補修に予想をはるかに上まわる人手と経費を要したであろう。七年前、わたしたちが危惧し、指摘した予想が不幸にも的中した。計画中止、廃道の処置は当然であったが、この結果に対する責任は厳しく問われなければならない。

四、狸台に自然は甦ったか

午後一時を少々回っていたが、昼食を延ばし、「狸台林道」(Ⅱ)に向うことにした。ルベンナイ林道ゲートを入るとすぐ左側に、小規模の法面がある。とり立てて指摘するほどのものではないが、奇妙なことに、毎年、この部分が崩れ、補修が行われた跡がある。地層は凝灰岩質で、ほぼ常時水が浸み出しているようだ。特殊な地下水脈の端にあたっているのかも知れない。対岸から見る限り「狸台林道」(Ⅱ)の下側は崩壊がおさまっているようだ。ただ気になるのは、年々トドマツ(この地区の標高千m台はトドマツ優占の森林)の枯木



礫層を切ったため崩落が進行
(ポンケチャロマップ林道)

が目だつてきているようだ。断定的な表現は避けたいが、林道隣接帯の樹木の衰弱は否定できないと思われる。同林道約三・四kmを車で入る。終点から同林道(Ⅲ)(計画中止約一・三km)の途中まで踏査することにする。標高約千m台で、林相はトドマツの純林に近い針葉樹林である。各種の調査、その他に利用されたためであろう、歩道と思われる跡をたどりながら進む。伐採の形跡は全くない。四〇度前後と推定される急峻な地形である。同林道(Ⅲ)の計画では、この地形を横切ることになっていた。今日の土木工学の技術では当然にも、可能であったろう。しかし、わたしの実感では、

あまりにも無謀としか言えない。しかも、この地区を一巡する観光自動車道が机上で線引きされたことがあると聞かされると、なんとも恐れ入る次第である。

わたしたちは、この林道を七年間見つけてきた。そして不思議なことに気づいてきた。開削当初、この道路を通ったとき、急峻な地形のせいか、恐ろしさがあつた。ところが何回も通るうちに、いまではそうは感じなくなった。慣れのせいかも知れないが、そればかりではないようだ。路幅が年々広がっているようだ。視察のたびに路面にはブルトナーの跡があり、一見、整備が行きとどいているようだ。七四年九



崩落がつづきついに金網でおおった法面（狸台林道Ⅱ）

月の視察のときは、崩落の土石のため途中で車が入れなかった。七八年六月、市民参加の見学のときには、崩落場所は直前にブルトナーで整地され、踏み跡にヒメシヤクナゲの無残な姿があつた。当日参加のY氏は次のように述べている。「二週間前に予察に来たとき、狸台林道は上部のり面の崩落がひどく、車をのり入れるのが危険な状態であつたので、参加者のみなさんには林道入口から歩いてもらったが、驚いたことに崩れた岩石や植物を道路に敷きつめブルでならしてある。為に道路は建設当時より四〇センチは厚くなり一メートルは広くなっていることが明らかだった」（大雪の自然を守る四五号78・9・5）。

これが日常の林道維持管理の結果であるなら問題は別である。ではなく、自然保護団体や市民の眼から自然破壊の実態をおおいかくすための一時しのぎの行為であるならば、それは、この林道の名から通俗的に連想される人間を「バカス」以外の何物でもない、あえて言わなければならぬ。七年間、この林道の変化を見つけてきたひとりとして、わたしは次のような個人的な感想をもっている。

① 削り取った斜面（粘板岩層）からの崩落は連続的につづいている。おそらく風化、浸食がかなり進行し、自然条件に対応でき

る程度の地形、構造に変化し、並行して自然植生が崩壊を防止できる程度回復するまで崩落はつづくであろう。したがって、人工的な補修はぜひ必要であるが、多くを期待したり、過信することは避けなければならない。

② 外観的に見る限り、日高累層群に属する粘板岩の地層は、かなり複雑な変成を受けており、微しゅう曲構造が顕著で、小規模な断層及び破碎構造も多い。そのため、機械的に破碎されやすく、局部的な崩落が連続的に起こりやすい。

③ 崩落場所と地層の走向、傾斜の間にははつきりと相関関係が認められる。

④ わたしの浅い知識でも、この程度の指摘ができるのに、高度の知識と技術をもつはずの営林局や開発局の「頭脳集団」がどうして、この結果を予想できなかったのだろうか。あるいは、「この程度」の結果は特に問題にする必要がないと初めから決めてかかったのだろうか。

⑤ 「狸台林道」（Ⅱ）の自然回復について営林局の担当者（責任者）は比較的楽観的な見透しを述べてきた。しかし、七年間、この林道を視てきて、現在なお二次的な破壊が進行している実態から言えることは、楽観的な予測とは逆の結果が現実に出現している事実である。

五、結語―国民の権利として

あれから八年、一時は全国的な話題ときえなつた「大雪林道」（当時の新聞表現は無残な自然破壊の結果のみを残して、人びとの記憶から消えようとしている。しかし、表大雪の原生林の山肌につけられた傷跡は茶褐色に濁り、あまりにも醜い。

一人が一本の草花を採っても厳しく罰せられる国立公園の中で、大規模な原生自然の破壊が公然と赦されるとは……。言うまでもなく、国立公園・国有林は国の管理下にある。憲法理念から見れば、「管理権」は国民から委任された権限であり、権限の行使は原理として国民に対して責任をおうものでなければならぬ。また、国民は主権者として当然、管理者に対し、発言し、「要求」する権利をもっている。したがって、よく耳にする「直接かかわりのない自然保護団体の人間がうるさくて仕事がやりにくい」などと言った考えは許されない。わたしは、ひとつのささやかな提言をして、この文を終わりたい。狸台の自然が、大雪の自然のかけがえのない一部として甦る日を悲願する。そのために、管理者もわたしたちと現場に出かけて一緒に考えようではないか。（大雪と石狩の自然を守る会）